

Into my Packet



後藤滋樹の

新・社会楽

後藤滋樹
goto@goto.info.waseda.ac.jp
早稲田大学 理工学部 情報学科

第55回「Question」

【なかなか出ない質問】

学会や国際会議などの催物の舞台裏にいると、いろいろと苦労することがある。中でも「日本人は質問をしない」という傾向には、日本人である私もほとほと困ってしまう。

なぜ質問が出ないのが困るかという、米国あたりからやって来て本邦初演の講演を済ませた先生は、最後に質問が出ないと相当に落ち込んでしまう。晩飯に寿司や天ぷらをご馳走したくらいでは回復しない。

仕方がないので、さくらの質問を仕組むことになる。これが意外と難しい。講演を聞く前に質問を考えるには、予習をすることになり手数がかかる。それに、予定通りの質問が可能とは限らない。さくら組は緊張を強いられる。

【質問の意味が違う】

私の愛用している岩波書店の国語辞典によれば、「質問」とは「わからない事、疑わしい事を問いたすこと」とある。なんだか尋問するような雰囲気が漂う。これによると、講演が100パーセント明快で疑う余地がない場合には、質問をしないことになる。

落ち込んでいる講師を励ますのに「あなたの講演はとてもわかりやすかった。だから質問が出なかったのですよ」と言っても大抵は通じない。ひょっとして、日本語の「質問」というのは英語のクエスチョンとは違うのではないか。

そこで愛用の大修館のジーニアス英和辞典を引く。当然ながら「question」は「質問」と書いてある。こういうときは英和辞典ではダメだ。ロングマンの英英辞典では「情報を求める文あるいは句」とある。コリンズでは「例えば情報を聞いたり、意見を求める時に使う言葉」という。ウェブスターには「尋問」もあるが「問い合わせ、照会」も並んでいる。総じて英語の方が気楽な感じがする。

【反応を示す必要】

実際の場面における質問の意義は、聞き手から講演者への反応だと思う。どのような講演の名人でも、聴衆からの反応がほしい。闇に向かって講演をするのは虚しい。少人数の会場ならば、米国式に話の途中で質問をするのも歓迎される。その質問というのは、簡単なもので十分である。

実は日本人は優れた反応をする。だから、日本人の講師なら

ば質問が出なくても聴衆の反応がわかる。日本人の反応の一例は、うなずくことだ。首をたてに振る人が多い。その動作の大小には個人差があるのだが、大きな会場であれば、よくうなずく人を見つけることができる。この人の反応を観測すれば大丈夫だ。

もちろん、うなずいている人が講演の内容を理解しているという保証はない。ただ態度のうえでは傾聴している。これは、会話における「はい」の役割と似ている。日本人が対話をするときに、相手の話の切れ目に「はい」という。これをイエスと直訳するのは間違いであって、「はい」は「あなたの言っていることを聞いた」という受信確認の信号である。英語ではフムフムという感じで確認することもあるようだ。これは、「はい」のように一般的とは思えない。



【居眠り厳禁】

もっとも、首が異常に大きく振れている人は居眠りの恐れがある。会議の主催側に立つと、聴衆の中に居眠りが頻発すると当惑する。自分が話をしている場合には、目覚しの代わりに会場を笑わせる工夫をするのだが、舞台裏からは何もできない。居眠りをしている人は当然ながら話を聞いていない。それが誰の目にも明らかだし、講師にも見える。

私の知人に居眠り名人と称される人がいる。とにかくどこでも眠ってしまう。本人によると入場料の高い会場で眠るのが最高の贅沢だという。この紳士は世界各地で居眠りを楽しんでいる。

そのような知人には警告を発することにしている。米国人は居眠りをしない。もし眠る場合でも顔を下に向けない。それは屈辱の姿勢であるからだ。米国の小学校でよく見られる罰則は、生徒に対して「10分間のヘッド・ダウン」という。ヘッド・ダウンとは文字通りに頭を下げること。何度かヘッド・ダウンをしても改善しないと、ほら今度は校長先生の部屋に呼び出されるぞ。

【沈黙は不気味】

格言にいわく、沈黙は金、雄弁は銀。これは美しい言葉だと思う。しかし国際的に普及するのが難しい。思ったことを口に出して言ってしまうのが正直者だとすると、いろいろと考えているのに質問をしない人は不気味に映るらしい。

このようなコミュニケーションの行き違いは、口頭の会話だけではなく、電子メールによる通信でもときどき起こる。とにかく反応を早く示す必要がある。日本人にとって、米国式は少々あわただしく感じられる。

Illustr : Harada Kaori



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp